

西欧中世初期社会・経済史の総合を目指して：最近の2著をめぐって

森本，芳樹

<https://doi.org/10.15017/4494386>

出版情報：経済學研究. 62 (1/6), pp.97-109, 1996-03-01. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



西欧中世初期社会・経済史の総合を目指して

——最近の2著をめぐって——

森 本 芳 樹

「ヴァリオールム・リプリント」と呼び慣わされているシリーズが、最近優れた業績をあげた歴史家の主要な論文を選び、それぞれ単行本にまとめて次々と出版することで、学界に大きな寄与をしていることはよく知られている。ヨーロッパ学界では、それぞれの研究者が独立の作品として発表した論文を、そのままの形で取り集めて書物を作るという習慣が、わが国よりずっと少ないだけに、研究史のなるたけ厳密な把握の上で仕事をしようとする際に、重要な論文の探索と入手に手間取ることが多い。その点で、すでに400点を越えているこのシリーズが果たした役割は、極めて大きなものがある。

最近このシリーズの中に、西欧中世初期社会・経済史に関するベルギーの歴史家による2著が次々と刊行された¹⁾。ベルギー中世史学界がH. ピレンヌ以来、中世初期社会・経済史をリードするだけの影響を持ってきたことは、広く知られているが、今回ここで論文が取りまとめられたアドリアン・フルヒュルストとジャン＝ピエール・ドヴロワも、それぞれこの分野で注目すべき業績をあげてきた研究者である。

以下では、これら2冊の論文集の検討を通じて、最近大きな展開を示している西欧中世社会・経済史の主要な問題点を探ってみたい。

I アドリアン・フルヒュルスト『中世初期北西ヨーロッパの都市的・農村的諸側面』

本書は、中世社会・経済史でここ四半世紀以上ヨーロッパ学界をリードしてきたA. フルヒュルストの業績の中で、中世初期に関する仕事に宛てられている。H. ピレンヌからF. L. ガンスホーフとH. ファン・ウェルヴェーケへと受け継がれてきた、ベルギーのヘント大学での中世社会・経済史研究を現在支えているフルヒュルストは、極めて多産な歴史家であり、母国語であるオランダ語でだけではなく、英・独・仏語による仕事をも多数発表してきた。それは若き日の大部な学位論文がすでにそうであったように、年代的には中世全般に及んでいるが、一般的な叙述が要求する場合には、近世から現代までに及ぶこともある²⁾。地理的には、フルヒュルストの研究対象はヘントを取り巻くフラン

1) A. Verhulst, *Rural and urban aspects of early medieval Northwest Europe*, (Variorum Collected studies series, 385), Aldershot/Brookfield 1992; J.-P. Devroey, *Etudes sur le grand domaine carolingien*, (Variorum Collected studies series, 391), Aldershot/Brookfield 1993.

2) その学位論文は、A. Verhulst, *De Sint-Baafsabdij te Gent en haar grondbezit (VIIe-XIVe eeuw). Bijdrage tot de kennis van de structuur en de uitbating van het grootgrondbezit in Vlaanderen tijdens de Middeleeuwen*, Brussel 1958. 中世から現代にまで及ぶ叙述としては、A. Verhulst, *Précis de l'histoire rurale de la Belgique*, Bruxelles 1991.

ドル、もう少し大きくとってネーデルラントに集中してはいるが、問題によってはヨーロッパ全体に視野を広げて、比較史的な考察を試みている。

農村史でも都市史でも一流の仕事をしてきたフルヒュルストの論文集であるだけに、本書は「第1部 農村史」と「第2部 都市史」という構成になっているが、以下にその篇別と論文名を示しておこう³⁾。

序言

第1部 農村史

カロリング期の農業と荘園組織

I 「フランス中世初期における古典荘園制の生

成」

II 「ローマ帝国末期と中世初期のコローヌスの賦役労働についての若干の所見」

III 「カロリング期ロワール・ライン間における荘園制の多様性」

IV 「ライン河の東と西とにおける古典荘園制の比較研究」

V 「中世『農業革命』の再検討」

VI 「カロリング期の農業政策。『御料地令』と792・3年及び805・6年の飢饉」

フランドルにおける中世初期農村景観

VII 「中世初期を通じてのベルギー低地部と中部における荘園及び耕地構造の異なった型。説明の試み」

3) Preface

PART ONE : RURAL HISTORY

CAROLINGIAN AGRICULTURE AND MANORIAL ORGANIZATION

I. La genèse du régime domanial classique en France au haut moyen âge, in *Settimane di studio del Centro italiano di studi sull'alto medioevo*, XIII, *Agricoltura e mondo rurale in Occidente nell'alto medioevo*, (Settimane, 16), Spoleto 1966, pp. 135-160 ;

II. Quelques remarques à propos des corvées de colons à l'époque du Bas-Empire et du haut moyen âge, in *D'une déposition à un couronnement 476-800 (Rupture ou continuité dans la naissance de l'Occident médiéval)*. Colloque organisé par l'Institut des Hautes Etudes de Belgique, 4-5 juin 1975, in *Revue de l'Université de Bruxelles*, 1977/1, pp. 89-95 ; III. La diversité du régime domanial entre Loire et Rhin à l'époque carolingienne, in *Villa-Curtis-Grangia. Landwirtschaft zwischen Loire und Rhein von der Römerzeit zum Hochmittelalter*, (Beihefte der Francia, 11), München-Zürich 1982, pp. 133-148 ; IV. Etude comparative du régime domanial classique à l'est et à l'ouest du Rhin à l'époque carolingienne, in *La croissance agricole du haut moyen âge*, (Flaran, 10), Auch 1990, pp. 87-101 ; V. The "Agricultural Revolution" of the Middle Ages reconsidered, in *Law, custom and the social fabric in Medieval Europe : Essays in Honour of Bryce Lyon*, Kalamazoo 1990, pp. 17-28 ;

VI. Karolingische Agrarpolitik : Das Capitulare de Villis und die Hungersnöte von 792/93 und 805/06, in *Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie*, 13, 1965, pp. 175-189

EARLY MEDIEVAL RURAL LANDSCAPE IN FLANDERS

VII. En Basse et Moyenne Belgique pendant le haut moyen âge : Différents types de structure domaniale et agraire. Un essai d'explication, in *Annales : Economies - Sociétés - Civilisations*, 1956, pp. 61-70 ;

VIII. Le paysage rural en Flandre intérieure : son évolution entre le IX^e et le XIII^e siècle, in *Revue du Nord*, 244, 1980, pp. 11-30.

PART TWO : URBAN HISTORY

TOWN ORIGINS IN NORTH-WEST EUROPE

IX. An aspect of the question of continuity between Antiquity and Middle Ages : The origin of the Flemish cities between the North Sea and the Scheldt, in *Journal of Medieval History*, 3, 1977, 175-205 ;

X. The origins of towns in the Low Countries and the Pirenne thesis, in *Past and Present*, 122, 1989, pp. 3-35 ; XI. Les origines urbaines dans le Nord-Ouest de l'Europe : essai de synthèse, in *Francia*, 1987, pp. 57-81.

THE EARLY HISTORY OF FLEMISH TOWNS

XII. Early medieval Ghent between two abbeys and the Count's castle in Ghent, (with G. Declercq), in *In defence of a rebellious city*, Antwerp 1989, pp. 1-52 ;

XIII. Les origines et l'histoire ancienne de la ville de Bruges (IX^e-XII^e siècle), in *Le Moyen Age*, 66, 1960, pp. 37-63 ; XIV. The origins and early history of Antwerp, translation from : Het ontstaan en de

vroege topografie van Antwerpen, in *De stad Antwerpen van de Romeinse tijd tot de 17e eeuw. Topografische studie rond het plan van Virgilius Bononiensis*, pp. 1-33.

Addenda

Index

VIII「9世紀-13世紀フランドル内陸部における
農村景観の展開」

第2部 都市史

北西ヨーロッパにおける都市の起源

IX「古代から中世への連続の1側面。北海・ス
ヘルデ河間フランドル諸都市の起源」

X「ネーデルランドにおける都市の起源とピレ
ンヌ学説」

XI「ヨーロッパ北西部における都市起源。総合
の試み」

フランドル諸都市の初期史

XII「中世初期ヘント。二つの修道院と伯城砦の
間」

XIII「都市ブリュッヘの起源と初期史（9-12世
紀）」

XIV「アントウェルペンの起源と初期史」

補足

索引

本書に収められた、フルヒュルストによる中世初期の農村史と都市史とでの代表的な仕事には、その学風が極めてよく表れている。まず印象的なのは、考察の素材の広さとそれにふさわしい分析技法の多様性である。歴史家として伝統的な文献史料に取り組むことは勿論だが、ここでは文書史料と記述史料のいずれにも片寄ることなく、またそれぞれの中でもともかく研究対象に関係するものなら選り好みせず、あらゆる種類の記録を取り上げている。中世初期という史料が量的には貧しい時代を手がけているだけに、そこで発揮されるのは、大量な材料の統計的处理という力技ではなく、個々の文言とその前後関係の徹底した読解であり、その際重ねられていく推論の巧妙さには、目を見張らされ

ることが多い。次に注目すべきは様々な地図(→《sources cartographiques》)の利用であり、これらは主として近世以降に作成されているから、それらから中世初期の状況を遡及して再現する手法が用いられる。これに地名史料を加えて、地誌的視角からする考察がフルヒュルストの得意技の一つとなっている。こうした歴史地理学者としての資格の一つが、フルヒュルストの自然諸科学への造詣の深さであることは、言うまでもなからう。最後に、最近驚異的とも言える進歩を示している考古学が提供する材料に、フルヒュルストが常に注意を怠っておらず、特に都市史におけるその仕事は考古史料の活用を抜きにしては考えられない。

フルヒュルストの学風をさらに特徴づけているのは、どんな研究対象についても、これまでの研究史を取りまとめ、その先に出る仕事を試みようとする態度であり、しかもこの研究史を全ヨーロッパ学界的に捉える能力である。これはL. ジェニコにも見られた⁴⁾ところだが、ロマン語学界とゲルマン語学界の橋渡しを自己の役割と心得る、ベルギーの優れた歴史家に共通の資質である。その際、オランダ語を母国語としながら、英・独・仏語を能動的に駆使しうる語学力が、何と言っても強みになっている。イタリア学界とスカンディナヴィア学界の成果にも十分通じているから、残るものがあるとすれば、東欧学界とスペイン学界との成果の摂取であろうか。

次に指摘したいのは、史料的にも研究史的にも膨大な素材を相手にするフルヒュルストが、徹底的に実証的な態度で検討を進め、ともかく事実につこうとする態度を優先して、概念化に

4) L. ジェニコ著・森本芳樹訳『中世の世界』創文社 1976年、402-403頁。

は極めて慎重であり、いずれにせよ、あれこれの理論を意識的に援用した一般化は避けていることである。フルヒュルストには歴史認識論の仕事もあり、抽象的な思考も展開できる資質を十分に持っていると思われるが、中世史に関する限り、いわゆる実証史家であることを誇りとしているように見える。ただし、イデオロギー偏重的な業績に対しても、そのことから直ちに拒絶反応を起こして無視してしまうようなことはなく、あくまでもそこに含まれている史実認識から学び、これを検討する態度は変えていない。

最後に、フルヒュルストはいったん手がけた問題について、その後も絶えず関心を持ち続け、新しく提供された素材や学説に常に取り組んでおり、その点で学者として極めて良心的だと感じられる。それに伴って、新史料の分析や異なった見解の摂取によって、いったん発表してある自説を訂正するのを躊躇していない。幸い農村史についても都市史についても、一般的な問題についての見解の変更は起こっていないが、実証史家としてのフルヒュルストにとって極めて重要なはずの、個別史実についての見解訂正をしばしば試みるところに、共感を覚えすにはいられない。

このような学風の中から生み出された、フルヒュルストによる西欧中世初期社会・経済史についての業績は、農村史と都市史とのいずれの分野においても、1950年代までの有力な学説を決定的に批判することに成功したが、そうした学説が殆ど通説の地位を占めていただけに、まさに画期的なものだったとして過言ではない。まず農村史においては、ことにフランス学界で目立っていた過小評価を打破して、古典荘園制

の中世初期農村における決定的な意義を、改めて認識したことである。それも古典学説に見られたような、カロリング期に全土を覆い尽くしていたかのような静態的な描写ではなく、農村構造の絶えざる変動の頂点としての古典荘園制という、極めて動態的な位置づけであることが重要である。他方で都市史の分野では、中世都市の形成を遠隔地商業の成果として紀元千年前後に位置づけたピレンヌ学説を拒否して、それがローマ期の都市的集落との連続の上に、国際商業の影響によるのみではなく、在地的・地域的な社会・経済的發展の拠点として、存在し続けたことを示した点である。

もちろんいかに優れた業績でも問題点はある。フルヒュルストの場合には、実証史家としてのその態度からして、個々の論文の水準ではその完結性は非常に高いものの、本書のような形で多方向での仕事を並べてみると、それらの全体から一つの像を作り出そうとする過程で、いくつかの問題点が浮かび上がってくるように思われる。まず農村史について言えば、荘園制という社会・経済組織を扱った4論文と、農業と景観という農村生活の物的基礎を論じた4論文との間に、若干の距離が感じられる。それは、古典荘園制の形成を通じて、中世初期農村の進歩的性格を押し出した前者に対して、後者では、中世初期農業技術の未発達と開墾の限定された性格が、しばしば強調されているからである。フルヒュルストの仕事での考古史料の活用は、現在までのところは主として都市史について行われており、今後続々と提供されるに相違ない農村部の考古学的調査の成果を利用して、荘園制の展開過程に適合的な農業と景観との構想が、さらに練り上げられることが期待される。ついで都市史については、ピレンヌ学説を徹底的に

批判した上で、なおカロリング期に北海からバルト海にかけて繁栄した遠隔地商業を重視し、ヨーロッパ西北部での中世初期都市史での主要な1局面とするフルヒュルストの構想を、中世都市成立過程でどこまで一般化できるか、という問題が見逃せない。いくつもの商業地を結んで行われたこの国際的な商業が、どの範囲まで到達していたかには議論があり、最近ではフルヒュルストの取り扱う地理的範囲にあるムーズ流域は、それと無関係だったとの有力な見解もある⁵⁾。北海商業が及んでいない場所についても、あれこれの形での遠隔地商業の偏在を前提として、それを中世都市成立の必然的な要因とすることは十分に可能だと思われるが、ピレンヌ批判の後にどうしても必要な作業が、都市形成をめぐる遠隔地商業と在地商業との関係の精密な考察であろう。

このように見てくると、本書において農村史と都市史がありながら、都市＝農村関係を正面から扱った論文がないのが、いかにも淋しいことだと感ぜられる。フルヒュルストには中世後期の都市＝農村関係を論じた仕事⁶⁾はあるが、中世初期についてはまだそうしたものが無い。しかし現在の学界では、中世初期にも一定の都市現象を認めているのであるから、この時期についても都市と農村との関連を構想することが、課題となってきたのである。現に、ピレンヌ批判という研究方向で、都市と農村とを一体として考察する先駆者となったG. デスピイに

献呈された論文集『中世における都市と農村』

(1991年)⁷⁾には、紀元千年以前についての論文が何篇も収められている⁸⁾。この論文集にはわが国からの寄与も3本あるが、2本は私の編著『西欧中世における都市＝農村関係の研究』(九州大学出版会、1988年)を母胎とする中世初期に関する論文である⁹⁾。西欧中世初期社会・経済史の第一人者であるフルヒュルストに、このテーマでの仕事が期待されるのが当然であろう。

その場合、本書の第1部と第2部での議論の間に見られる方向の相違から、そうした仕事の中で問題になってくるはずの論点が、二つ浮かび上がってくる。第1は、古代から中世への移行において、農村史では荘園制を場として断絶が強調されるのに、都市史ではむしろ都市的集落を場として連続が主張されていること。第2は、農村史では9世紀が古典荘園制展開の最盛期とされ、その意味で在地的・地域的交易への農村剰余の供給が潤沢であったとされているのに、都市史では都市形成に在地的・地域的交易が貢献した時期が10・11世紀とされていること。都市＝農村関係を含めた中世初期社会・経済史の総合的な叙述を、史料を熟知した歴史家に求めるとすれば、現在ではアドリアン・フルヒュルスト以上の著者は考えられないだけに、こうした論点についてなお考察が進められることを期待したい。

5) 後掲ドヴロワ著第12論文が、典型的な例である。

6) A. Verhulst/E. Thoen, *Le réseau urbain et les campagnes dans l'ancien comté de Flandre* (ca. 1350-1800), in *Città e campagna in Europa*, (Storia della città, 36), 1986, pp. 53-60.

7) A. Duvosquel/A. Dierkens (ed.), *Villes et campagnes au moyen âge. Mélanges Georges Despy*, Liège 1991.

8) 例えば, D. Hägermann, *Grundherrschaft und städtischer Besitz in urbarialen Quellen des 9. Jahrhunderts*, *Ibid.*, pp. 355-365.

9) 中世初期に関するものは, Y. Morimoto, *Considérations nouvelles sur les <villes et campagnes> dans le domaine de Prüm au haut moyen âge*, *Ibid.*, pp. 515-531 ; S. Tange, *La formation d'un centre économique en Ardenne au haut moyen âge*, *Ibid.*, pp. 677-691. なお, M. Yamada, *Le mouvement des foires en Flandre avant 1200*, *Ibid.*, pp. 773-789 は, 中世盛期に関する論文である。

II ジャン＝ピエール・ドヴロワ『カロリ グ期荘園の研究』

本書には、1970年代後半から次々と斬新な切り口の論稿を発表して、問題関心の革新に大きな貢献をしたばかりでなく、所領明細帳を中心とする史料の批判的検討と刊行にも力を注いできた著者の14篇の論文が集成されている。この叢書の慣例に従って、これらの論文は原型のままで写真製版されているが、冒頭には書き下ろしの序文が配されて、本書の研究史での位置づけを明らかにしている。それによれば、1966年のA. フルヒュルストによる問題提起¹⁰⁾に始まった中世初期荘園制の再検討は、紀元千年以前の社会・経済史を人口増加、農村開発、市場の展開などの積極的な諸局面において捉え直し、それらの中心的な場として荘園を考えるとともに、大領主の利害を代表した王権、教会、高級貴族こそが、こうした発展を推進した原動力であるとして、それまでことにフランス学界で強く主張されていた中世初期社会経済に対する悲観説を批判してきたが、ここに収録された諸論文は、まさにそうした研究動向を推進しようとして書かれたという。さらに、末尾には「追加と訂正」という項目が置かれて、ことに初期の諸論文について、それぞれの刊行後に行われた他の研究者による批判的な発言を考慮に入れた、補正が行われている。ここでも、まず本書の篇別と論文名とを示しておこう¹¹⁾。

序言

I 「荘園制：フランク王国。動態的把握の試み」

史料の再読解

10) 前掲フルヒュルスト著第1論文。

11) Préface

INTRODUCTION

I. The large estate in the Frankish kingdoms : a tentative dynamic definition, translation from 'Grundherrschaft, Frankenreich', in *Lexikon des Mittelalters*, IV, col. 1740-1744, München 1989.

DES SOURCES A RELIRE

II. Les premiers polyptyques rémois, VIIe-IXe siècles, in *Le grand domaine aux époques mérovingienne et carolingienne*, Gent 1985, pp. 78-97 ; III. Problèmes de critique autour du polyptyque de l'abbaye de Saint-Germain-des-Prés, in *La Neustrie. Les pays au nord de la Loire de 650 à 850*, (Beihefte der Francia, 16/1), Sigmaringen 1989, pp. 441-465 ; IV. A propos d'un article récent : l'utilisation du polyptyque d'Irminon en démographie, in *Revue belge de philologie et d'histoire*, 55, 1977, pp. 509-514.

LES BASES MATÉRIELLES

V. Les méthodes d'analyse démographique des polyptyques du haut moyen âge, in *Acta Historica Bruxellensia*, IV, Bruxelles 1981, pp. 71-88 ; VI. La céréaliculture dans le monde franc, in *L'ambiente vegetale nell'alto medioevo*, (Settimane, 37), Spoleto 1990, pp. 221-253 ; VII. Entre Loire et Rhin : les fluctuations du terroir de l'épeautre au moyen âge, in *L'épeautre (triticum spelta), histoire et ethnologie*, Treignes 1989, pp. 89-105.

LES FORMES DU GRAND DOMAINE

VIII. Pour une typologie des formes domaniales en Belgique romane au haut moyen âge, in *La Belgique rurale, du moyen âge à nos jours. Mélanges Jean-Jacques Hoebanx*, Bruxelles 1985, pp. 29-45 ; IX. *Mansi absi* : indices de crise ou de croissance de l'économie rurale du haut moyen âge, in *Le Moyen Âge*, 82, 1976, pp. 421-451.

LE GRAND DOMAINE DANS L'ÉCONOMIE D'ÉCHANGE

X. Les services de transport à l'abbaye de Prüm au IX^e siècle, in *Revue du Nord*, 61, 1979, pp. 543-569 ; XI. Un monastère dans l'économie d'échanges : les services de transport à l'abbaye de Saint-Germain-des-Prés au IX^e siècle, in *Annales : Économies-sociétés-civilisations*, 1984, pp. 570-589 ; XII. Villes, campagnes, croissance agraire dans le pays mosan avant l'an mil : vingt ans après... in *Villes et campagnes au moyen âge. Mélanges Georges Despy*, Liège 1991, pp. 223-260.

ÉCONOMIE ET POLITIQUE AUX TEMPS CAROLINGIENS

XIII. Units of measurement in the early medieval economy : the example of Carolingian food rations, in *French History*, 1, 1987, pp. 68-92 ; XIV. Réflexions sur l'économie des premiers temps carolingiens (768-877) : grands domaines et action politique entre Seine et Rhin, in *Francia*, 13, 1986, pp. 475-488.

Addenda et corrigenda

Index

- II 「ランスの初期所領明細帳。7-9世紀」
- III 「サン・ジェルマン・デ・プレ修道院所領明細帳をめぐる史料批判の諸問題」
- IV 「イルミノン所領明細帳の人口学での使用。最近の1論文について」

物的基盤

- V 「中世初期所領明細帳の人口学的分析の方法」
- VI 「フランク世界における穀物耕作」
- VII 「中世ロワール・ライン間におけるスペルト麦栽培地の変動」

荘園の諸形態

- VIII 「中世初期ベルギーのロマン語地域における荘園諸形態の類型論に寄せて」
- IX 「『空いているマンス』。中世初期農村経済の危機の指標か、成長の指標か」

商品＝貨幣経済の中での荘園

- X 「9世紀プリュム修道院における運搬賦役」
- XI 「商品＝貨幣経済の中での修道院。9世紀サン・ジェルマン・デ・プレ修道院における運搬賦役」
- XII 「紀元千年以前のムーズ地域における都市、農村、農業成長。デスピイ論文以後20年」

カロリング期における経済と政治

- XIII 「中世初期における度量単位。カロリング期食糧割当の例」
 - XIV 「カロリング初期(768-877年)の経済に関する考察。セヌ・ライン間での荘園と政治行動」
- 補足と訂正

索引

本書に収められた諸論文を見渡してドヴロワの学風を捉えてみようとすると、とても一筋縄ではいかない。一方では、その議論の運びと結論のつけ方の慎重さが目立つが、他方には、史

料読解における短絡や細かい史実についての誤解(その一部は本書の「追加と訂正」で撤回されているが、それ以外にも目につく)も多い。歴史学の作業とは何よりも史料的基础の構築であるとする態度は一貫しているが、問題の理論的处理に大きな熱意を示し、それが大胆すぎる印象を与えることもままある。こうした多面的な学風を貫いて押し出されるのは、実証こそが本領だとする伝統的な中世史家とは異なった、一定の史料から発言できる範囲を広く取って当然とする、細心だが大胆な歴史家のイメージである。ドヴロワがマルクス主義も含めて人文・社会科学の様々な方法に広く通じていることは、文章の端々に表れている。自然科学の成果を積極的に利用する態度と力量もあり、考古史料や古銭史料の分析にも積極的に取り組んでいる。こうした全ての点から、本書の著者がまさに新しい世代に属する中世史家であると、強く感じられるのである。

さて、このような学風から生み出された本書は、何よりも論争の書であり、中世初期の社会・経済的水準を低く評価し、場合によってはこの時期に破局的な状況を見ようとする、いわゆる悲観説こそが批判の標的とされている。それは、最近ではG. デュビイ、ついでR. フォシエを代表者としてフランス学界で目立ってきたが¹²⁾、その淵源はより深い所にあり、ドヴロワの同国人の大先輩であるH. ピレンヌの学説こそ、現

12) 両者の中世初期に対する悲観説を典型的に示す論文を、1篇ずつ挙げておこう。G. Duby, Le problème des techniques agricoles, in *Agricoltura e mondo rurale in Occidente nell'alto medioevo*, (Settimane, 16), Spoleto 1966, pp. 241-252 ; R. Fossier, L'économie du haut moyen âge entre Loire et Rhin (jusque vers 1200), in *La fortune historiographique des thèses d'Henri Pirenne*, Bruxelles 1986, pp. 51-59.

在の悲観説の起源となったと考えられている¹³⁾。

こうした悲観説に対して中世初期復権の史料的基础として選ばれたのが、史料としては周知で広く利用されてはきたが、その批判的検討が19世紀以来お座なりにされてきた、所領明細帳だったのである。興味深いのは、この史料類型に対する関心が、1970年代後半からヨーロッパ学界で極めて強く表れてきて¹⁴⁾、ドヴロワの仕事がその一翼を担っていたことである。それは、サン・レミ修道院とロップ修道院との所領明細帳の新版¹⁵⁾刊行とともに、所領明細帳の史料論的分析を大きく進めた点で、大きな貢献をしたと言えよう。その第1は、メロヴィング期から始まるとされるこの史料類型の歴史的進化の追跡である。所領明細帳の起源についても様々な学説があったが、本書での主張の特徴は、これを古典荘園制の形成というフランク期の現実の一環として、中世初期の歴史的過程としたところにある。第2は、所領明細帳を一定時点で大がかりに作成された統一的な記録と考え、これを静態的な描写の素材という役割に閉じこめてしまう従来の仕方から離れて、伝来する形での所領明細帳の複層性を証明した点にある。それは一方では、所領管理の異なった水準での台帳の作成と集成から由来するが、他方は、異なった年代に作成された複数台帳の後の時点での集成によっても生じてくる。本書の所領明細帳史

料論における貢献の第3は、その主観性の強調であろう。これは現在盛んに行われている史料論の主要論点の一つであるが、作者の動機と手続きによって記録の性格が決定されることを、ドヴロワは繰り返し指摘しており、それらの綿密な検討によるそれぞれの記載範囲の画定と、こうして判明する史料の証言能力に即した使用を、求めているのである。

以上のように史料的基础を固めた上で、そこから著者が読み取ろうとするのは、まず中世初期の生産能力が相当な水準に達していたという事実である。人口についての議論では、所領明細帳の厳密な吟味という史料論的な作業が大きな位置を占めていて、この史料を使った安易な悲観説が成立しないという主旨になっており、カロリング期における人口増加の可能性の論証に終わっている。これに対して穀物に関しては、所領明細帳の複層性を利用した分析を通じて、中世初期にはことにライ麦と燕麦との普及に助けられて、多様な穀物の組み合わせによる進歩した農業が行われており、しかもそこには、スペルト麦栽培の王権による促進のように、社会上層の主導性が発揮されていたとの、積極的な議論が展開されているのである。ただし、悲観説の基礎の一つになっている低位な農村開発という認識を、正面から批判するに至ってはおらず、そのためには、所領明細帳によって土地占取と定住形態をどの程度把握できるかの検討が、重要となるであろう。

ところで、中世初期についての悲観説を最終的に拒否できるのは、このように確保されていた物的基盤を十分に活用できる社会・経済組織があったからだと考え、荘園制こそがそれであったと論証して、その描写を果たそうというのが本書最大の眼目である。本書においては、荘

13) 特に、ドヴロワ著第12論文を見よ。

14) 最近の所領明細帳研究については、森本芳樹「カロリング期所領明細帳研究の成果と課題」『経済学研究』53-4・5, 1988年, 69-83頁; 54-1・2, 1988年, 249-270頁; 同「西欧中世初期荘園制の諸側面——最近5年間における農村史の研究状況」(2), 同誌, 58-4・5, 1993年, 225-241頁。

15) J. -P. Devroey, *Le polyptyque et les listes de cens de l'abbaye de Saint-Remi de Reims (IXe-XIe siècles). Edition critique*, Reims 1984; Id., *Le polyptyque et les listes de biens de l'abbaye Saint-Pierre de Lobbes*, Bruxelles 1987.

園は従来のように農村における自給的な生産と支配の場とされるのではなく、流通、商業、さらには都市現象をも包み込む世界と捉えられる。従ってここに収められた諸論文は、荘園史の従来の主たるテーマには、全般的な関心を示さない。例えば領主直領地については、その販売可能な余剰の生産能力が特に問題とされ、農民負担の中では運搬賦役が戦略的重要性を持つものとして選択されることによって、大領主によって荘園制の枠内で組織されていた流通網が、詳細に描き出されているのである。このようにして、本書は従来の荘園制研究の範囲を大きく越え、カロリング期社会・経済全般を包み込む組織としての荘園像を提示することによって、その時期での荘園制の機能を小さく評価することを柱とする、中世初期への悲観説に対する根底的な批判たりえているのである。

本書の悲観説批判の意図を最もよく示しているのが、社会・経済的發展の主導力として、王権、教会、高級貴族から成る社会上層——本書では国制の細部に立ち入ることはないままに、これら全体をカロリング国家と呼んでいる——の政治的行動の意義を強調している点である。カロリング王権による一連の勅令が示しているように、この時期の統治者に国家建設とそれにふさわしい社会・経済生活の整序の努力があったことは、長い研究史の中でももちろん注目されてきた。R. フォシエが最も強く主張した¹⁶⁾ところであったが、悲観説はこれを現実とは全くかけ離れていたと考える。これに対してドヴロワは、教権と俗権とを融合した社会的安定の創出

というイデオロギーからこの意欲が由来すると、その主観性を強調するが、それでもそれが現実には密着していたと主張する。まさに、カロリング期社会の政策的起動力について、真っ向から対立する二つの見解であり、こうした構図において悲観説を相対化したところが、本書の特質の一つなのである。しかしながら、統治者の意欲と政策が現実性を持ったか否かは、それらと社会・経済的現実との距離を史料に基づいて測り、具体的な諸措置の結果を実証的に明らかにする¹⁷⁾ことなしには、結局は水掛け論に終わってしまう危険が大きい。こうした観点から、本書の方向において研究をさらに進めていく道を探ってみなければならないが、そのためにはまず、ごく最近での学界状況の変化を確認する必要がある。

1990年代になってからのヨーロッパ学界での中世初期社会・経済史をめぐる議論は、本書に収録された諸論文がその渦中で書かれた悲観説と楽観説との対立から、さらに次の段階へ移っているようである。ドヴロワなどによって精力的に展開された悲観説批判が成果をあげたのであろうか、ともかく、中世初期に一定の経済成長を認める見解が、全体として優勢になってきた。それも、従来悲観説の本場であったフランス学界でそうした状況が生まれていることが、極めて印象的なのである¹⁸⁾。中世初期への悲観

16) この点を強調した代表的な論文として、R. Fossier, *Les tendances de l'économie carolingienne : stagnation ou croissance?* in *Nascita dell' Europa ed Europa carolingia : una equazione da verificare*, (Settimane, 27), Spoleto 1981, pp. 261-290.

17) カロリング王権による政策の実現過程が具体的に検討された分野として、古銭学の成果を利用することのできた貨幣史がある。森本芳樹「西欧中世前期貨幣史の諸問題——1960年以降ヨーロッパ学界の研究成果から——」『経済学研究』56-5・6, 1992年, 204-206頁。

18) このことを象徴するのが、フランスの中世史家を中心となってテーマを選び、ヨーロッパ各国から専門家を招いて、毎年1回フランダで開かれる国際会議が、1988年に『中世初期における農業成長』を論

説の系となってきた、紀元千年前後における急激な変化を重視する学説は、フランス学界でますます盛んであるが、それ以前の時期に関しても一定の社会・経済的發展を認める立場が、一般化しているのである。その著書『紀元千年の変革』によって、中世盛期初頭に「封建革命」と呼べるほどの飛躍があったと主張して、大きな議論を引き起こしたG. ボワが、中世初期についての経済成長を確認しているのが、典型的な例である¹⁹⁾。注意すべき点は、だからと言って現在の学界において、本書の代表する見解が全面的に受け入れられるようになってきたわけでは、決してないことである。それは、このように中世初期の社会・経済的發展を積極評価するようになってきたフランスの中世史家たちの有力なグループは、それが具体化された場として荘園を考えているのではなく、むしろ領主制的支配を基本的には受けていない独立農民を、そしてそれらの共同体をこの發展の担い手として考えているからである²⁰⁾。

このように見てくると、本書の立場が現在の学界で対立しているのは、中世初期についての悲観説ではなく、むしろ、この時期の發展における荘園制の意義を低く評価する、いわゆる「独立農民モデル」だということになる。まさに、この古くて新しい立場と自己を対照しながら、ドヴロワの中世初期についての学説は、さらに

深められていかなければならないのである。そして、そのような営為が現在の学界では一つの対話を構成する可能性があることを、私は別稿で指摘した²¹⁾が、「独立農民モデル」による研究者との対話は、悲観論者との対決が水掛論に終わる危険が大きかったのとは違って、ドヴロワの研究をさらに深化させる契機となりうるであろう。ここでは、以下の2点を指摘してみたい。

第1に、「独立農民モデル」との対話のためには、ドヴロワは荘園制に組織された、あるいはその過程にある働き手の像をより明確にしていかなければなるまい。本書においては、農民の人口動態や経済状況の多くの面が解明されているが、中世初期の社会・経済的發展の主導力を領主層の政治的行動に見る視角が、もう一つの有力な原動力でありえた働き手へのふさわしい関心を、なにかし滅殺していることは否めない。奴隷制や奴隷的非自由人の動向への言及が、本書で極めて少ないのもそのためであろう。「独立農民モデル」との対話の中で、ドヴロワの現在までの業績のこうした弱点が補正されてくる可能性が大きい。

第2に、逆にドヴロワは、「独立農民モデル」を奉じる研究者たちがなお十分に考察を深めていない分野を突きながら、自説をさらに深めていくことができるであろう。それは、中世初期における都市と農村との関係である。確かに上述のボワの書物では、都市＝農村関係に当てられた1章²²⁾はあるが、古代的な都市による農村支配から中世的な両者の補完関係への移行として、極めて理論的な見通しを語っているにすぎ

題としたことである。その会議録は、*La croissance agricole du haut moyen âge. Chronologie, modalités, géographie*, (Flaran, 10), Auch 1990.

19) G. Bois, *Les mutations de l'an mil. Lournand, village mâconnais de l'Antiquité au féodalisme*, Paris 1989.

20) 現在のヨーロッパ学界における「荘園制モデル」*modèle domanial*と「独立農民モデル」*modèle allodial*との対立については、森本「荘園制の諸側面」(前注, 13) (4)『経済学研究』60-1・2, 1994年, 7-15頁。

21) 森本芳樹「西欧中世初期における社会・経済的發展の担い手を求めて。対話的研究の展望」『経済学研究』59-3・4, 1994年, 295-307頁。

22) Bois, *op. cit.* (前注, 18), pp. 115-150.

ない。そもそも中世初期農村の主要な階層として独立農民を考え、しかもこの時期にある程度以上の都市現象があったとする場合には、どのような場所として都市的集落を構想することになるのであろうか。「独立農民モデル」を有効とする論者は、もともと南欧世界の史料からの発想が強く、都市的なものをどうしてもローマ期から継受された集落の中に見いだそうとして、中世特有の都市現象の想定に関心が向かわない傾向がある。こうした点に関する史料をさらに綿密に検討していくことによって、本書の流通や都市に関わる論点がいっそう深められていくことが期待されよう。

III 総合への途

以上のように、フルヒュルストとドヴロワとの論文集を検討してみると、二人の最近の優れた業績からも、西欧中世初期社会・経済史の新しい総合的叙述の下地ができ上がってきているとの印象が強い。第二次大戦以前からこの分野での回転軸をなしてきたピレンヌ学説への批判は、これら2著に見られるとおり、その故国においてはもはや決定的となったと見てよく、ヨーロッパ学界全体としても同様であろう。ピレンヌ学説の延長上に位置して、戦後のフランス学界で力を揮った中世初期に対する悲観説の後退にも、ここで取り上げた諸論文が大きく貢献している。

もちろん、フルヒュルストとドヴロワとの仕事は、それぞれの問題点を含むものであった。ことに両者を通じてなお検討が必要だと思われるのが、中世初期における都市＝農村関係であるが、この点についても、荘園制が内包する都市的現象というドヴロワの提示した最新の観点

が、議論をリードしていくことができよう。また、これまた両者を通じて、社会上層の活動の浮彫と比べて荘園内外での働き手の状況描写が弱いと感じられる。しかしこの点も、最近極めて活発な荘園制研究の中で、奴隷制や賦役労働に向けられている強い関心²³⁾を考えるなら、ヨーロッパ学界全体としては克服されつつあるとしてよいであろう。

ただし、現在こうして可能になってきている西欧中世初期社会・経済史の総合的叙述のためには、本稿で取り上げた二つの書物では正面に押し出されていない、さらにもう一つの視角があると感じられてならないので、その点に触れて終わることにしたい。フルヒュルストの中世初期農村についての仕事の中で、荘園制によるその進歩的性格の浮彫と、農業／景観から見たその未発達強調との間に一定の乖離があることは上述した。ドヴロワの場合、穀物耕作の検討によって農業史へ寄与はあったが、農村景観（土地占取、定住、耕地形態など）についての業績はなおあげられていない。荘園制という社会・経済組織を積極的に評価することによって、中世初期を復権することに成功したが、その重要な物的基盤である農村景観については、なお解明が不十分なのである。確かに、近年では荘園を空間組織として捉える視角も打ち出されているが、これはフルヒュルストとドヴロワとの著書にも見られる広域的流通網の描写に主として向けられていて、在地での空間組織についてはそれほど仕事が達成されていない²⁴⁾。こうして、農村景観こそ西欧中世初期社会・経済史の総合的叙述に向けて、なお研究を重ねなければ

23) 森本「荘園制の諸側面」（前注，13）（3）『経済学研究』59-5・6，237-241頁。

24) 同論文，232-235頁。

ばならない分野と思われるが、その意味は、少なくとも以下の2点にわたって極めて大きいと感ぜられる。

第1に、本稿が取り上げた2著では、西欧中世初期荘園制の積極的側面に力点が置かれている。ここでは、社会・経済の一般的な基礎となるまでに確立した小農民経営を、領主が在地的に掌握して所領に組織するばかりでなく、複数所領の統合によって広域的な流通網に仕立て上げ、その中心地には都市的集落を維持しているという、荘園制の姿がその大筋において跡づけられた。しかしながら、こうした中世初期の荘園制では、半奴隸的労働力と賦役労働に頼る領主直接経営の構造的な重味があって、小農民経営展開への制約となっており、それが内包する流通網と都市現象も、中世盛期以降のそれらと比べるならば、なお著しく未発達なものであったことは、否定できないであろう。フルヒュリストやドヴロワが先頭に立って進めてきた中世初期荘園制の研究は、過小評価を訂正するためにその役割を積極的に押し出すにとどまっていた、その限界を明らかにする作業をなお今後の課題としているのである。そして、この作業の重要な場が、農村景観の観点からの荘園制の描写であろう²⁵⁾。本書で明らかにされた中世初期の荘園制は、土地占取や耕地・定住地のどのような形態を基礎としていたのであろうか。村落と荘園との関係は、中世農村史の古くて新しい

テーマであって、こうした深味から解明されてこそ、西欧中世初期の荘園制の独自性が、さらにはこの時代の社会・経済構造の独自性が、浮かび上がってくることになるであろう。

第2に指摘したいのは、農村景観への注目が、荘園制研究により現代的な視角を導入してくる途となりうる点である。最近盛んに行われてきた中世初期荘園制の研究——私自身もその一翼を担ってきたが、——は、なんとしても、成長／開発を積極的な価値とするイデオロギーによって彩られてきた。中世初期という時代の復権を目指すといっても、中世盛期以降に連なる成長／開発の実存を論証するという志向が強かったものであり、中世初期独自の社会・経済構造の追究とは、必ずしもなっていなかったと思われる。こうした研究方向への反省も、すでに始めている。西欧中世初期の社会・経済の独特の豊かさは、中世盛期以降について行われてきたように、開墾と耕作の普及をもって進歩の指標とすることによっては追求できないというのである。こうした観点から注目されるのは、非耕地、特に森林の独自の価値であり、これとそれ自体多様な形態で利用されている耕地との均衡の上に立った、中世初期独特の生態系である。環境問題の歴史的研究は、現在流行のテーマである²⁶⁾が、本稿で扱っている範囲では、食生活という根底的な次元から農村史を検討してきたM.モンタナリー²⁷⁾や、森林の多様な活用を論じて

25) この点を検討するもう一つの場合が、中世盛期荘園制への移行過程の検討であろう。1987年の中世初期荘園制に関する研究集会をうけて、1993年にゲッチンゲンで行われた研究集会では、まさにこのテーマが扱われている。それぞれの成果は、W. Rösener, (ed.), *Strukturen der Grundherrschaft im frühen Mittelalter*, Göttingen 1989; Id. (ed.), *Grundherrschaft und bäuerliche Gesellschaft im Hochmittelalter*, Göttingen 1995.

26) 中世初期を環境の観点から検討した仕事として、イタリアの歴史家を中心とした *L'ambiente vegetale nell'alto medioevo*, (Settimane, 46), Spoleto 1990と、イギリスの考古学者による J. Rackham (ed.), *Environment and economy in Anglo-Saxon England*, (CBA research report, 89), York 1994 を挙げておく。

27) M. Montanari, *L'alimentazione e cultura nel medioevo*, Bari 1988.

きた Ch. ウィッカム²⁸⁾を先頭として、イタリアとイギリスの歴史家の仕事が目立っている²⁹⁾。しかも注目すべきことに、森林こそが自由農民の活動の場であるとするウィッカムの主張に見られるように、成長／開発史観への批判が、論者によっては「独立農民モデル」と結びつき、ともかく荘園制の役割の限界性への注目と重なり合っている。荘園制を柱とする西欧中世初期社会・経済史の総合的叙述にも、なお大きな課題が残されていることが明らかであろう。

28) ウィッカムの諸論文も、最近次の書物に集成された。Ch. Wickham, *Land and power. Studies in Italian and European social history 400-1200*, London 1994.

29) 森本「荘園制の諸側面」(前注, 13) (1)『経済学研究』58-2, 1992年, 65-66頁。